

第7回 HOPE ミーティング 終了報告書

所属・学年	大学院社会理工学研究科人間行動システム専攻 博士後期課程3年
プログラム名	第7回 HOPE ミーティング
開催期間	2015年3月1日(日)～3月5日(木)
開催地	ザ・東京パーク・ホテル(東京港区)
参加者	アジア・太平洋及びアフリカ主要国・地域からの博士後期課程・ポストドク100名(うち日本側23名)
使用言語	英語

1. 概要

日本学術振興会(以下学振)は、アジア・太平洋・アフリカ地域から選ばれた優秀な大学院生・ポストドクなどが、ノーベル賞受賞者等の世界の地のフロンティアを開拓した人々との対話、同世代の研究者との交流を深めるため、2007年度より開催するものです。そこで、世界各地からきた博士後期課程の学生やポストドクの皆さんが集まり、午前はノーベル受賞者によるレクチャー、午後はノーベル賞受賞者を囲んだグループディスカッション、そして自分のポスター発表など、様々なイベントが行われました。

また、今年は上記の内容に加え、「ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2015」が3月1日に東京国際フォーラムで開催され、HOPE ミーティングの参加者全員が参加することができました。

2. 事前準備

(1) Flash Talk & ポスター

参加者全員が各自の研究内容について、ポスター発表を行うことが義務付けられています。そのため、異文化背景をもつ多くの方々に理解してもらうために、英語で自分の研究内容を分かりやすくまとめる必要がありました。

また、自分のポスター発表の内容を1分間以内で説明するFlash Talkのパワーポイントのスライドを1月中上旬までに学振に送りました。

(2) チームプレゼンテーションのテーマの選定

プログラム最終日には、各チームによるプレゼンテーションをしなければならないため、事前にテーマの選定が必要でした。私たちの場合は、2月中旬頃にメンバー同士がメールによるやり取りを行い、自分の興味あるテーマについて投票で選択しました。そして、チームリーダーがあったほうがよいと他のメンバーたちのご意見もありまして、私はチームプレゼンテーションのリーダーとなりました。

3. 参加期間中の内容

(1) ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2015

3月1日に、ノーベル・プライズ・ダイアログ東京 2015 が東京国際フォーラムで開催されました。開会式には、学振理事長安西先生、文部科学省下村大臣より、英語で挨拶されました。午前には Richard J. Roberts 先生をはじめ、Kurt Wuthrich, Tim Hunt, Andrew Fire などノーベル賞受賞者によるパネルディスカッションが行われた後、山中伸弥教授、天野浩教授らによるスピーチが行われました。山中教授のスピーチが非常に印象的でした。

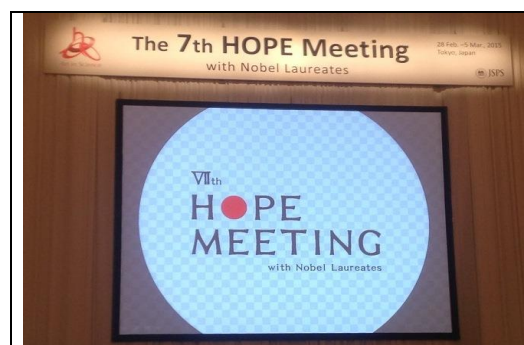
午後のパネルディスカッションはいくつかのテーマに分かれていて、私は「アジアにおける研究インターフェースの発展」と「ゲノム医学の未来：私たちはどのようにしてそこにたどり着くのか」に参加しました。

さらに、総括パネルディスカッションが行われ、ノーベル賞受賞者の方々より、「常に科学を誤解している、だからこそ課題を究明することができた」というご発言は非常に興味深かったです。

夜のレセプションには、天皇・皇后両陛下がご臨場され、また本学学長も出席されました。学長にご挨拶し、天野教授、山中教授らとも少しお話ができました。小林誠先生にもご挨拶できました。

(2) ノーベル賞受賞者等によるレクチャー

今回の講師はダン・シェヒトマン教授 (2011 年ノーベル化学賞受賞者)、ダグラス・ディーン・オシェロフ 教授 (1996 年ノーベル物理学賞受賞者)、森和俊教授 (2014 年アルバート・ラスカー基礎医学研究賞受賞者)、根岸英一教授 (2010 年ノーベル化学賞受賞者)、ヨハネス・ゲオルグ・ベドノルツ 博士 (1987 年ノーベル物理学賞受賞者)、グンナー・エクイスト教授 (前スウェーデン王立科学アカデミー事務総長) が順にレクチャーを行いました。中には、教授らが共通して強調されたのは、根気強く、粘り強く、よく準備して挑戦すること、また家族やパートナー、同僚らとよい関係を保つことはノーベル賞を受賞する近道であることは感銘深かったです。



(3) ノーベル賞受賞者を囲んだグループディスカッション

ノーベル賞受賞者の先生方を囲んで 15 人程度でフリーディスカッションが 3 日間連続して行われました。このグループディスカッションは特定なトピックがなく、みんなの聞きたい質問で質問をし、先生方が答えたりした形式でした。なので、私が参加した 5 つのグループディスカッションのスタイルがそれぞれ違って、アカデミックからプライベート

トまで幅広く意見交換ができました。

(4) Flash Talk&ポスター発表

3月2日に、参加者100人が自分のポスター発表について、午前・午後に分けて、1分以内でFlash Talkをしました。その後は3日間分けて皆さんがポスター発表を行いました。私の場合はFlash Talkをした直後にポスター発表を行ったため、Flash Talkをお聞きになった京都大学の森教授がわざわざポスターを見に来てください、アドバイスも下さいました。

(5) チームプレゼンテーション

各国・地域の参加者が事前に8人前後のグループに分けられ、そのメンバーたちがあるテーマを選定し、最終日に10分間のチームプレゼンテーションを行いました。私たちのチームは「By disseminating research results, contribute to society」にし、いかにすれば科学と社会のコミュニケーションギャップを縮めることができるかという観点から、3日間かけて準備しました。私たちのチームはわずかの差で「The Best Team Presentation Award」を逃しましたが、チームメンバーと協力し合って、また国境・文化差を越えて、チームをリードする経験ができて、大変よかったですと思いました。



(6) 文化体験と観光

3日目の午後は生け花と書道、夜のコンサートでは琴・琵琶・尺八・太鼓といった日本の伝統的な楽器での演奏で、多くの方々と鑑賞することができました。

また、最終日はJAMSTECと鎌倉を観光し、高德院・鎌倉大仏を見てきました。夜はマリントワーで、豪華な食事会が開かれました。ここでまたノーベル賞受賞者の方々を囲んでお話ができ、参加者同士もいろいろ交流ができました。



4. 全体の感想

私の分野は全くノーベル賞の諸領域と無関連ですが，それでもノーベル賞等の受賞者のスピーチやレクチャーを聞くことができ，本当によい刺激を頂きました。また，各地からきた博士後期課程の学生・ポストクの皆さんと研究のお話だけでなく，文化の面についてもいろいろ交流ができました。科学やテクノロジーは国境と関係ないことを新たに実感しました。

また，私の Flash Talk をお聞きになり，わざわざ私のポスター発表を見に来てくださった京都大学の森教授とお話ができ，アドバイスまで頂けたのは大変光栄に思いました。

私はこの会議を知ったのは学振からの知らせメールが届いたからで，もしかしてこれは特別研究員向けのものだと勘違いをして申し込んだのですが，実際今回国内の参加者の多くは学振の特別研究員（DC・PD）でした。同じ学振の特別研究員としても，分野や学年がそれぞれ異なるため，普段はなかなか交流できませんでしたが，この会議のおかげで，国内の社会的ネットワークも広がりました。

最後に，今回の会議で大変お世話になった学振の方々や学内担当者の方々，心より感謝いたします。

